

南無南無坊主達の潜む屋敷の奥へと進むと一人の女が現れた。

「ハッ、お久しぶりね。アフロサムライ。って、言っても知ってるのはあなたが殺したバカな姉のほうだったかしら」

肌はほとんどを露出しており、豊満な肉体が色香を放つ。

美しい髪、冷徹な眼差し、そして見覚えのあるかんざし。

女は軽い口調で以前に彼に殺された女忍者の妹であることを告げた。

はあ、いい、お久しぶりね。アフロサムライ。

って言っても知ってるのはあなたが殺した

無能な姉のほうだったかしら。

南無南無坊主には見つけ次第殺せとの

命令を受けてるけど……ふふふ、久しぶりの

良い男をただ殺すだけじゃつまらないわね



「どう？殺される前に私と遊ばない？あなた、お菊って女を抱いたようだけど、あんな田舎くさい女なんかじゃ物足りなかったでしょう？しかも、裏切って南無南無坊主に殺されたってバカみたいな最期で笑えるわ。」

「自慢じゃないけど、私のコレに挟まれた男はみんな一瞬でイッちゃうの」

女はケラケラと笑いながら、これ見よがしに己の胸を寄せる。



「痛みも感じずに殺してあげるんだから、私って優しいでしょう。うふふふふ。」

さあ、いっぱい、楽しみましょう」

冷徹なまなざしで、幾多もの男を虜にし、幾多もの男のモノを啜えてきたであろう唇が艶かしく彼を誘う。

四半刻後、部屋には女の喘ぎ声が響き渡っていた。

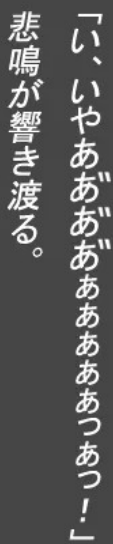
彼を陥れるはずが女忍者は逆に幾度もその豊満な肉体を犯され、身体の自由を奪われていた。彼のモノが激しく突き入れらる度に大きな乳房が激しく揺れ、先ほどの口調とは一変した恐怖の混じった声を上げる。

「や……い……あ。は……激しすぎ……るう……あつ。あんっ！」



アフロの手は止まらなかった。
自身を救ってもらい、また敵同士でありながらも愛という感情をくれたお菊。
そんな彼女の死を嘲笑ったこの女忍者に彼は心の底より怒りが溢れ出していた。
「どうした？まだ半分も終わっていないというのに、もう限界か？……悪いがそろそろ
最後を出させてもらうぞ」

女忍者の言葉も空しく、勢いよく大量の精液が彼女の中へと注がれる。



「ゆ、ゆるぎ……ない……絶対……ゆるぎ……ない……こんなこと……こん……」

「黙れ、外道」

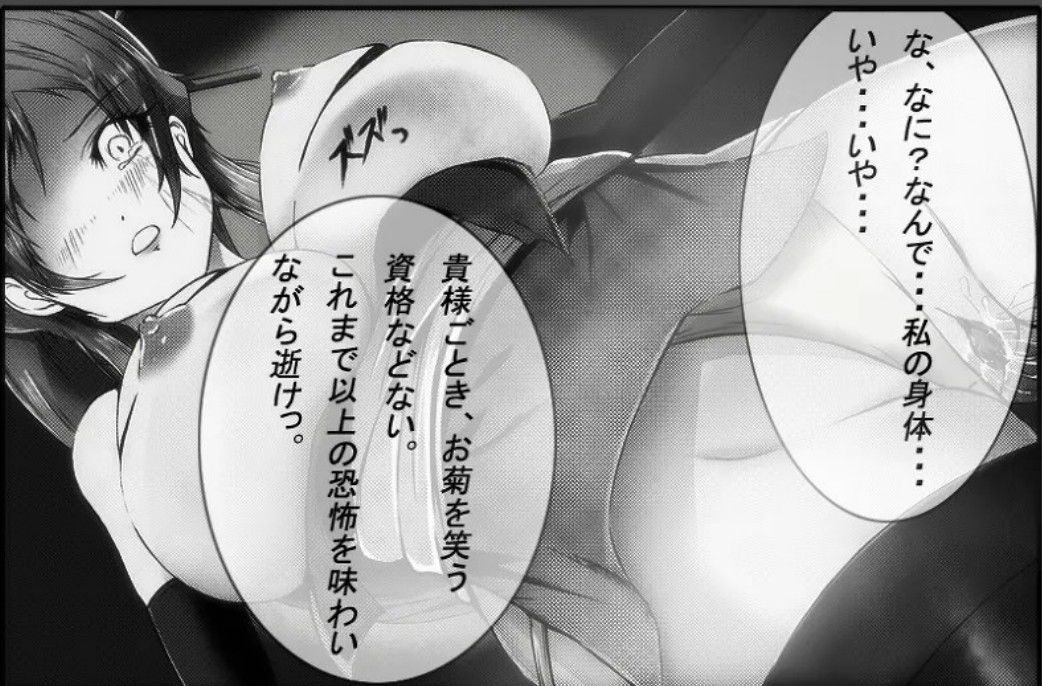
涙ぐみ、しかし憎悪に駆られた女忍者に、アフロサムライは冷徹に言い放った。

その瞬間、彼女の大きな胸を一筋の線が横に走ると、そこから彼女の身体に切れ目が広がっていく。

「な、なに？なんで…私の身体…いや…いや…」

徐々にずれていく己の身体に、くノ一は驚愕の表情で己に起きている異常に困惑する。

「貴様ごときお菊を笑う資格などない。これまで以上の恐怖を味わいながら逝けっ」



「いやっ。いやっ。死にたくない…死にたくないっ…たすけて…たすけ」
「手遅れだ。死ね」

「!?」

涙ぐむ女忍者の顔を一筋の線が走ると同時に血が滴り落ち、次の瞬間に彼女の顔がズレ落ちた。



「ふむ、やはりこやつでは役不足であつたか」
アフロサムライが去つてすぐ、部屋に南無南無坊主が現れた。
そこには変わり果てた女忍者の亡骸。

ふむ、やはりこやつでは
役不足であつたか



ジャステイスを倒した凄まじい剣技。
この切断面から見て、こやつは斬られたことに
気づかぬうちに死んだであろうな。意識は既
ないものの、身体がまだ生に執着しておるわい

胸部分で切断された亡骸には
刀が深く突き刺され、女の秘部を
突き抜けた部分から大量の精液と
彼女の血が勢いよく溢れ出ている。
切断されたにも関わらず中身を晒した
二つの乳房は激しく揺れ、亡骸は未だ
生にしがみついているかの様に
ビクンビクンと揺れ動く。
そしてすぐ側には胸から上を、顔を切断
され、中身を晒した女のもう一つの亡骸
が転がっている。
同様に未だ身体全体が激しく痙攣し、
切断された胸が揺れ動く。



…それにしても

「あのジャステイスを倒した凄まじい剣技。この切断面から見てこやつは斬られたことに気づかぬ
うちに死んだであろうな。意識は既にあるものの、身体がまだ生に執着しておるわい。
…それにしても」

「生意気な女だったが、噂以上の感触じゃ。射れただけで溢れ出しおったわ。前々から一度犯してみたかったが、こやつめはわしらに対して反抗的であつたからのお」
削げ落とされた顔は南無南無坊主に拾い上げられ、その艶かしかった口に大きなイチモツがねじ込まれていた。

その表情は苦痛に歪み、目は大きく見開かれ、それが己の死に顔となろうとは彼女自身、知る術もなかったであろう。

生意気な女だったが、噂以上の感触じゃ。
射れただけで溢れ出しおったわ。

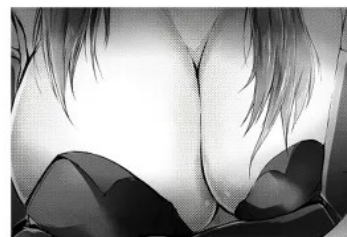
前々から一度犯してみたかったが、こやつめは
ワシらに対して反抗的であつたからのお

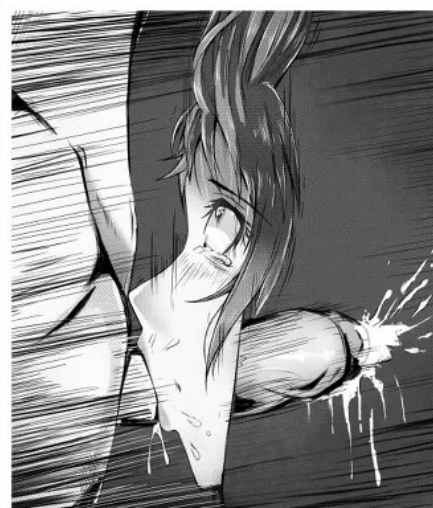
だが、こうなつてはもう拒むことも出来ぬ。
惜しむべきは生きた状態で楽しみたかったが……
まあよい。身体のほかあとで存分に楽しむとして、
貴様には今後はワシらの性処理玩具として扱わせて
もらうぞい。

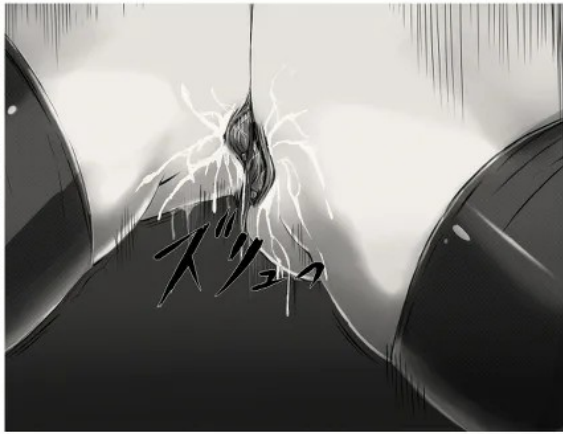
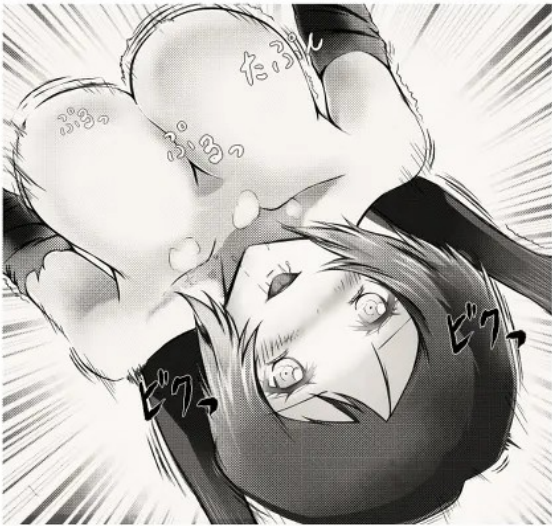
ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ



「だが、もう拒むことも出来ぬ。惜しむべきは生きた状態で楽しみたかったが、まあよい。身体のほかあとで存分に楽しむとして、貴様は今後はワシらの性処理玩具として扱わせてもらうぞい。ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ」
バラバラになつたくノ一の亡骸、
そして血に染まった部屋に、狂気に満ちた南無南無坊主の笑い声が響き渡る。







Thank you!



「どうしたの？」

「かかってらっしやい♡」



いやっ、いやあああ!!
助けて!助けて!
まだ死にたくない――

女とはいえ、悪徳大名に加担した
貴様らを生かしてはおかん。
己の醜い中身を晒しながら逝け

ひでえ、有様だな。
ほんの数時間前までは目の前で身体を
くねらせて踊り狂ってたっていうのに…

死体を見るに、フェラで大量にぶち込まれた

直後にそのまま斬られたか…

色仕掛けの通じる相手ではないというのに

まったく、間抜けな最期だな。

とは言え、女としてはかなりの上物だ。こうなっても

しばらくは俺たちの快楽になってくれよう。

特にこの女の身体は前々からめちやくちやに犯して

みたかつたんだ。

増じや、あの胸に挟まれた瞬間に逝っちまった奴も

いたらしいな。

ちっ、相愛わらず狂った野郎だ。
だが、ほんとにしとけよ。
こんなところを大名様に見つかったり
でもしたら洒落にもなんねえぞ。



ナンバー2のハチマキを
手に入れたアフロサムライ。
しかし、その代償は大きすぎた。
道中、重傷を負った彼はお菊と
いう女性に助けられる。
彼女の必死の介抱のおかげで
彼は命を救われ、やがて二人の
間には恋が芽生え始めていた。
しかし、お菊は南無南無坊主が
仕向けたくノ一であり、そして
昔死んだと思われたおつるの
成長した姿であった。
お菊は南無南無坊主を裏切り、
アフロと共に逃げようとするが
殺されてしまう。
アフロは再び深い悲しみに
捉えられながらも、
ジャスティスの居場所を知り、
お菊の仇でもある南無南無坊主
を追って旅をしていた。



一時の間、静寂に包まれた山奥に二つの刃が交わる
金切る音が鳴り響いた。
そして、最後の一太刀が振り下ろされる……



さすが、ナンバー2。
女でも容赦のない噂は
あながち間違いいでは
なさそうですね。

一は手加減もせず
いたすのですが……

長引く戦いとなるので
私に気があしませんわね。

では、この次の攻撃で

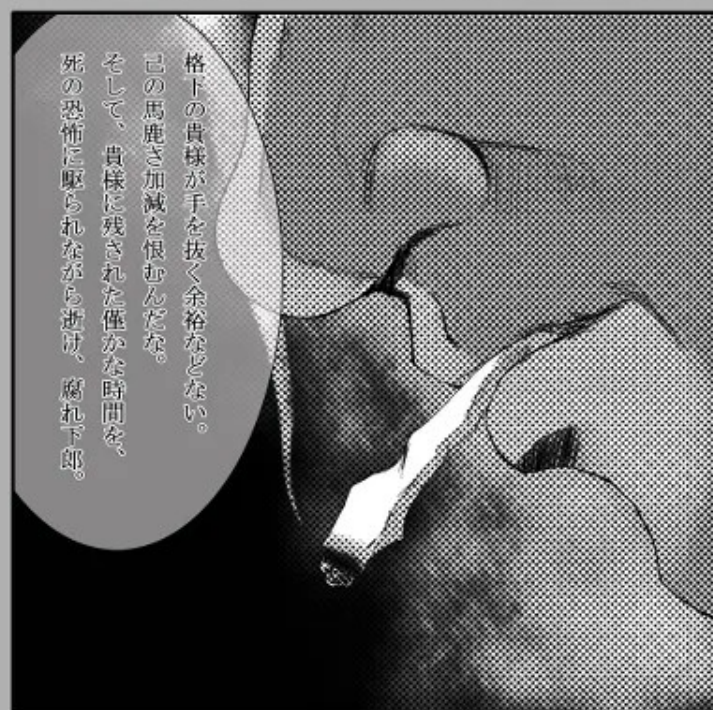
終わりにさせてあげますわ。
これは刀ほどではありませんが、人を
殺めるぐらゐり容易い代物ですわ。
そして、本気を出した私の速さはもう
貴方様の目でも追いつかぬもの。
避けることも防ぎきることすら出来な
いでしょうね。

クスッ。

最初は見目がいいいでしょうが。
見えなくなった敵を相手に、うろたえる
貴方様を眺めるのも一興ですわね。
或いは……









女忍者の醜い悲鳴を最後に再び静寂を取り戻してから一時、
二人の浪人風の男が女忍者であつたものに歩み寄り、そして――





はっはははっ！
噂通りのエロいケツしてやがる！
思わず顔を埋めたくなる感触だぜ。

たかがくノ一の分際でよおつ。
散々目の前で眺めかしく、締まった
身体をひけらかしておいて、こんな
肉塊になっちまったんじや
ザマアねえぜ。

気がおかしくなるぐらいにこのまま犯し尽くしたいが、
こいつでフィニッシュだ！！
たつぷりと受け取りなっ！

そんなもって、あの世で立派な俺の息子を
孕んでくれよ！へへへっ！

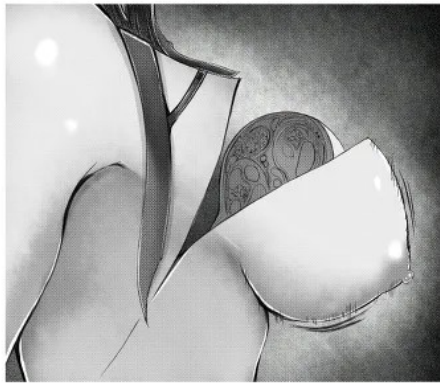
ふう・・・俺達を出し抜いてまでナンパー2に挑んだ
ものあつさりと返り討ちとはな。
忍びのくせして情けねえ最期だぜ。
しかし、女相手と言え容赦ねえ殺され方だな。
顔はもはや判別が不可能だ。

だが、これで自分の身体を
恥ずかしげもなく晒すことが
出来てんだから、ある意味本望だろうよ。
しかし、生きてる内にこいつの生意気な
口でフェラを堪能したかったが・・・

つと、それより、さつさと一番のハチマキを追うぞ。
うかうかしてたら他の奴らに手柄をとられちまう。
こいつには悪いが、このまま放置して行くぞ。
運が良ければ誰かに埋葬されるか、或いは血の臭いを嗅ぎつけた
獣共に噛み裂かれるか・・・せいぜいあの世から祈ってるんだな。
へへへへ。







あ……うう……
ゆ、許さない。にんげんのぶんさい
で……よくも……よくもっ

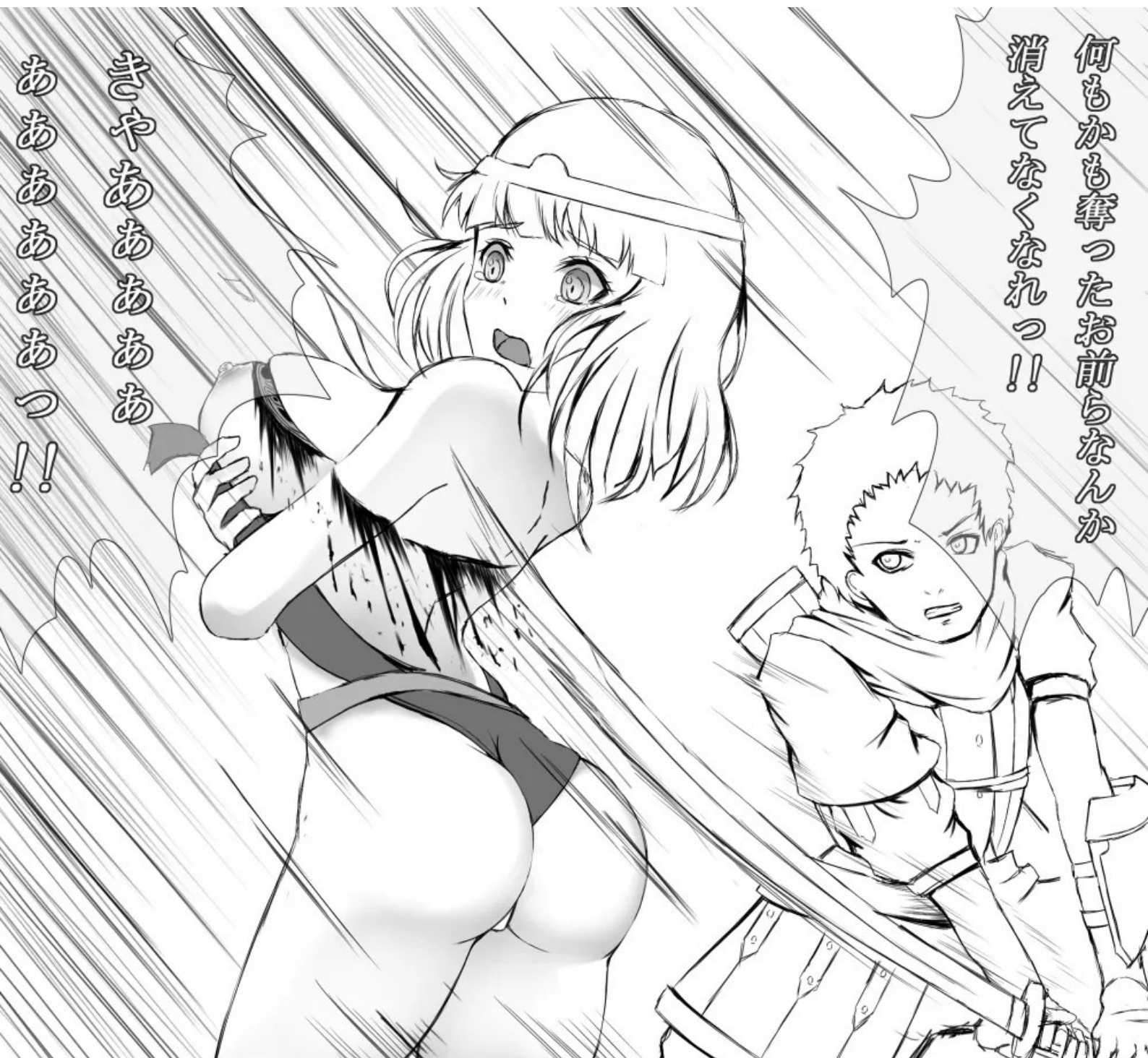
ふう。貴重な捕虜として
四剣士共が連れてきたが、こいつは
そこいらの女より良いぜ。
生かされている間はたっぷり
可愛がつてやるからな。

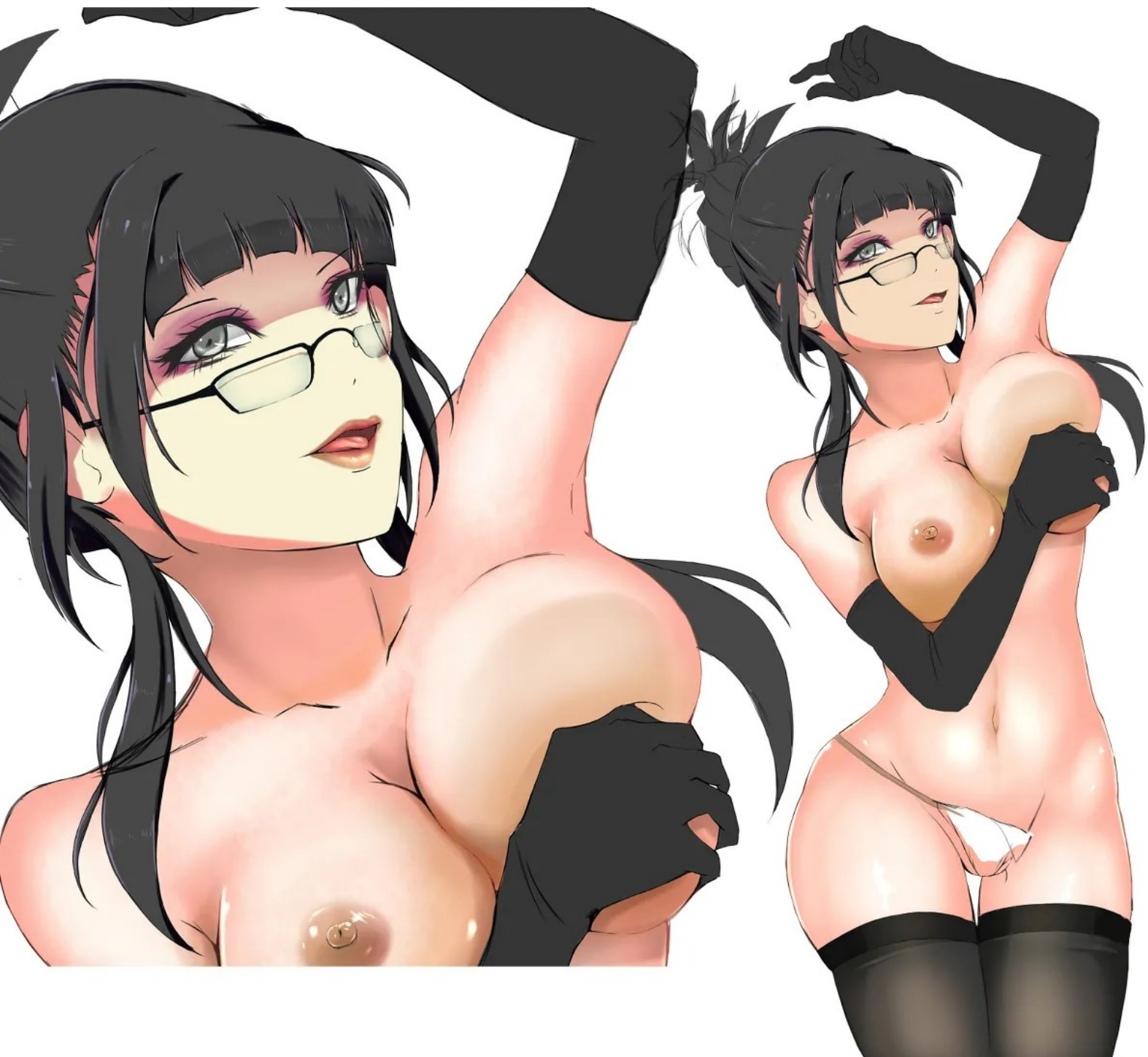


何もかも奪ったお前らなんか
消えてなくなれっ!!

ぎやあああああ

あああああつ!!











ポールキャット (Polecat)

悪徳大名の下にいた女集団。
他の者はアフロサムライによって
倒されたが、一人生き延びた彼女は
ある小さな町を支配下に置き、
屈強な浪人達を集め、復讐の機会を
持っていた。
十代半ばにも関わらず一際目立つ
大きな胸を持つ。
そのため数多くの兵が集まった。
残酷非道な性格で曲向かう者には
容赦なく、また、町の子供を連れ去って
は自分の快樂のおもちゃにする。
そのため、彼女への恨みを持つ者は
少なくはないが、治安というもの
が存在しないそこでは、町の人間は
抵抗出来ずにいる。
フェラを得意とし、彼女に殺された
男たちは皆死ぬ寸前に天国を感じ
ると言われている。





へらへらと五月蠅い女だ



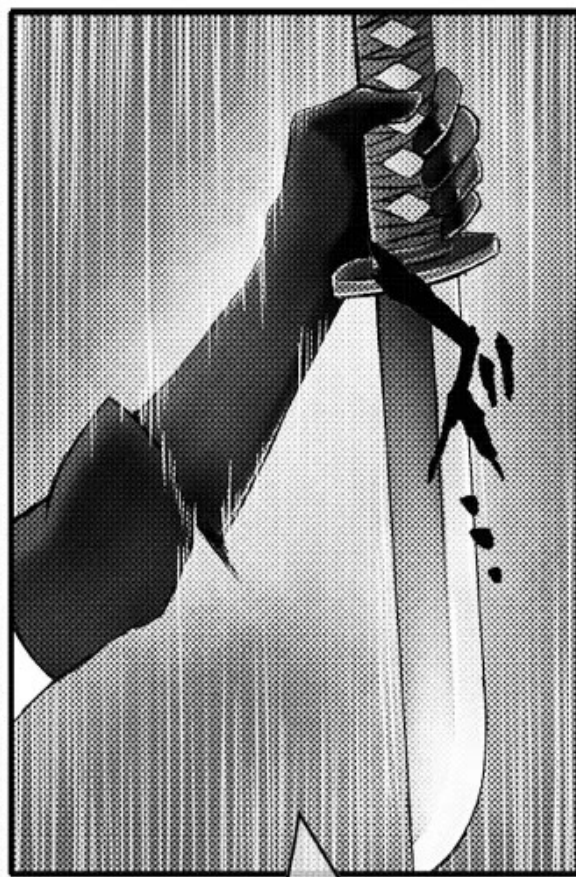
うづお













いやあああああああ
ああつ!!

まったく

乳もケツもエロそうに
しやがってよおっ!

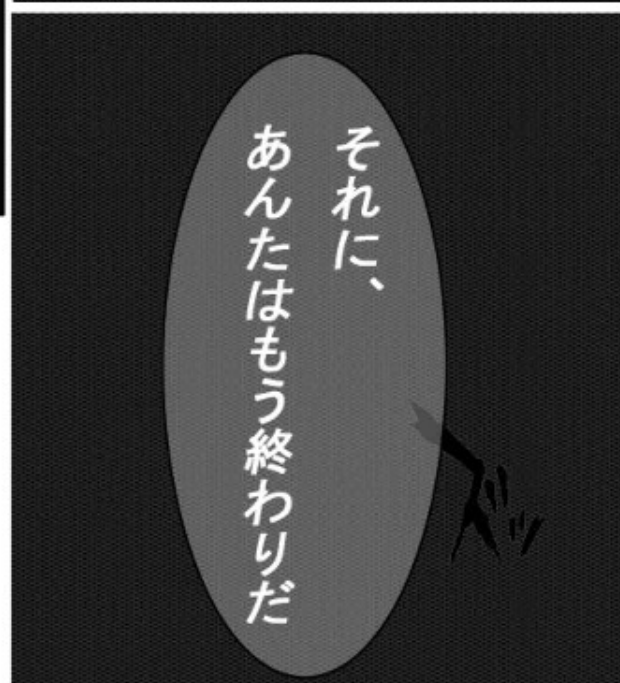


悪いが、無理な話だ。
個人的な恨みはないが
こちとら仕事なんでね。



や...めっ。
たすけ...て!

おいおい、今更命乞い
とはねえ...







絶命奥義　　屍遊び　　快感を与え続けた後、既に斬られた肉体は徐々に崩壊。更には精神さえも破壊し、極楽と地獄を味わいながら逝く。

腕を斬り落とした時には
もう既にてめえはこの技を受けて
動く死体も同然だったのさ。





残酷非道な技故、禁じられた技だが、子供
さえも手に掛けるあんたのような下衆には
ちよんどのいい技だ。
あの世でこれまでの非道を悔いな。

そして――



ナンバー2。
次はあんたの番だぜ。

「ちようど終わったようね」

駆け付けた始末屋仲間の女が男へ駆け寄ってくる。

「そっちは？」

「雇われの浪人とは言ってもほとんどが素人同然の腕前。おまけに女相手だと思っただけで全員ナメてかかってきたからバラしてやったわ」

男は半笑いを浮かべ、再び女の亡骸に目をやった。

「まあ、しかし、だ。悪行を重ねてきたとはいえ勿体ねえことをしちまったな」

「死んで当然じゃない、こんな女」

女は口を尖らせた。

「道を踏み外さなければ、每晚お願いしたいぐらいの身体の娘だったぜ。しかも噂じゃ、名のあるところの娘だって話だ。まっ、単なる噂に過ぎねえが……」

「ふう〜ん」

女はしばし亡骸を見つめた後、何かを思いついたのかうすら笑みを浮かべ

男の顔を覗く。

「ねえ、この女になってあげようか？」

「はあっ!？」

「私がこいつを着るの。そうすればこの女の身体をやり放題じゃん。中出しされるのだけは勘弁だけど」

「ばっ、ばかなこと言ってるねえで捕まってるガキ供を連れてさっさと帰えるぞ。いつまでもこんなところで油を売ってられねえ」

男はあきれ顔交じりに足早にその場を去った。

「まったく、冗談だったのに……」

女は笑みを浮かべる、が、すぐに未だビクついた女の亡骸に視線をやった。

「醜い最期なこと……でも、一度あんたのような良い身体を着てみたいのよねえ。あんたのお尻、唇、胸……そう、お前の身体ならあいつを私のモノに出来そうなの。だから……」

女は狂気にも似た笑みを浮かべると、そっと亡骸の大きな乳房を触りだした。

「なんて柔らかくて、綺麗な肌。それにとっても大きく。こんな肌に他の不要なモノは必要ないわよねっ!」女はまるで獣の如く、飛び出した臓物・肌に張り付く女の肉、そして骨をも抉り出していく。

「中身は後でちゃんと肥料や家畜の餌にでもしてあげるわ。そして地獄から魂の抜けた身体が行く末を見守り続けるといいわ。ふふふっ」